相談援助実習の展開過程に関する考察（１）
－初年次コンピテンシー・モデル試案－

淑徳大学　　稲垣美加子（会員番号００３３０９）

キーワード：相談援助実習、ソーシャルワーカー養成、コンピテンシー、

１．研 究 目 的

淑徳大学（以下本学とする。）では、平成 23 年度より導入したカリキュラムにおいて、学生の専門職志向を明確にした教育効果の積み上げを企図して、相談援助実習（以下実習とする。）を１年次（初年次）と３年次の２段階に分けて実施することとなった。これは、近年の本学の学生の傾向として入学時の社会福祉士の国家資格取得への動機に必ずしも専門職への志向性の確認が困難であることに起因する。

既述のように、本学では学生の間に“社会福祉の現場を体験してみたい”、あるいは、“資格があると就職に有利だから”といった曖昧な興味･関心から実習を志向する傾向が散見された。従来本学では実習を３年時に約４週間設定してきたが、この曖昧な動機のまま３年次まで教育を重ねていくことが、学生と教員の間の教育関係の力動に影響し、教育の質の低下を招くとともに、学生の学びの選択の機会を減少ささえているとの課題提起がなされたのである。

本研究においては、まず、本学において新たに取り組まれた初年次の実習体験が、その後の社会福祉士教育、ひいては学生の選択の機会の創出にどのような影響を及ぼしうるのか、１年目の実践結果を分析し視座の獲得を試みた。さらに、この分析結果を公開し評価を求めることによって今後の方向性の明確化とカリキュラム内容の修正の視座を得ることを企図した。

２．研究の視点および方法

①　研究の視点

本研究においては、まず実習終了後の学生から実習について、その所感を記述式で尋ね、記述内容を質的に解析することによって、学生が初年次に資格実習を体験することが、資格取得や専門性の向上にどのような動機や方向性となり得るのか、探究を試みた。次に、実習先施設の協力を得て、施設側の利用者、家族、さらには職員の印象を任意に確認し、初年次の現場実習が社会福祉実践現場にどのように受け入れられたのか確認した。さらに、学生の所感と実習先施設側からの評価を関連させ、本学の実習担当教員の評価や、先行研究の示唆を検討の俎上に乗せることによって実習の成果と課題の具体化を試みた。

②　研究方法

研究方法については、グレイザー派のグラウンデッド・セオリーを用いることで、学生の所感から仮の核概念の抽出を試み、これに施設側からの評価や教員の評価、先行研究の示唆をデータの切片として採用し、概念描写・理論化を試みた。研究方法として質的解析、中でもグレイザー派のグラウンデッド・セオリーを選択したのは、以下のような理由による。初年次という専門教育初学の段階の学生の曖昧な言語、つまり形式化の途上にある言語表現を分析するには、質的解析が適していると判断したからである。さらに、その曖昧な表現を教育者側の仮説

によって限定するのではなく、ありのままの表現に内在する形式途上知を概念へと整理する手法を選択することが、教育者にとってより開発的な視座を得ることになりうると考えたからである。こうして浮上した本学の新たな実習の取り組みの効果と課題を明示する概念をもとに、初年次における実習教育の視座へと理論生成（今後の実習教育仮説の立案）を試みた。

３．倫理的配慮

本研究においては、「日本社会福祉学会研究倫理指針」第２－C の規定に照らし、個人のプライバシーを一切侵害することなくデータを処理した。並びに発表に際しては、関係機関に本要旨、並びに発表内容を開示し発表の許可を得ている。

４．研 究 結 果

分析当初から、インビボコード（他の表現に比喩しがたい固有の表現）として浮上したのは、＜感謝＞＜嬉しさ＞である。特に＜感謝＞は分析の早い段階から、端的な表現として確認された。多くの学生が、＜不安＞あるいは、＜過信＞のどちらかを抱きながら＜初めての実習＞に臨み、様々な体験に【初年次コンピテンシー（competency）】を発揮しながら、あるいは引き出されながら実習を終えた様子が確認された。学生たちに、【初年次コンピテンシー】を発揮しうる状況を提供してくれたのは、＜現場力＞であり、＜利用者力＞であったものと考えられる。この学生たちを支えてくれた＜現場力＞や＜利用者力＞への＜感謝＞が学生たちの個人的な＜不安＞や＜過信＞をソーシャルワーク初学者の【初年次コンピテンシー】へと変容させたものと理解された。

ただし、こうしたソーシャルワーク初学者の【初年次コンピテンシー】は、全ての学生に確認される普遍的要素ではなく、一部にやや脆弱な＜想いで実習＞に帰着している学生も見られた。同じようなスケジュールで、同じ実習先で、同じメニューで、同じ利用者と関わりながら、一人ひとりの学生の中にそれぞれ異なる＜意味世界＞が形成され、＜コンピテンシー＞に至ることなく＜想い出＞に終わる場合、あるいは、＜忘却＞に陥る場合も確認された。

5. 考 察

本学の新しい試みは、学生に内在する【初年次コンピテンシー】の育成や、力の発揮に一定の効果が確認された一方で、まだまだ全ての学生に普遍的に何らかの効果を及ぼすプログラムに生成しえていない実態が確認された。本学では、初年次に相談援助実習を配置するにあたっていくつかの講義・演習科目を配置し実習の前提学習としている。今回の分析結果は、こうした企図が一定の効果を見せたことの確認となった。しかし、そこに顕在化した課題はさらに実習教育効果の普遍化・強化を図る必要性を示唆している。本研究の成果として概念化された「**初年次コンピテンシー・モデル**」が実習教育の質の向上、学生の学習志向性の明確化に寄与するモデルであるためには、本学の実習教育のオリジナリティを探究するとともに、本学学生の特性に合わせた自校教育との関連からさらなる検討を加えることの必要性が顕在化したものと理解された。本研究は一連のプログラムの１年目のアプローチの分析であり、今後も継続的にプログラム展開、検証を繰り返し、本学独自の実習教育メソッドの開発を企図していきたい。